

「中学部」 研究グループ

1 研究テーマ

情報活用能力に着目した授業づくり
～情報機器等の利用を含めた情報活用能力の育成に必要な手立てを考える～

2 研究テーマについて

今年度の中学部は14名の生徒が在籍している。1年生が3名、2年生が6名、3年生が5名である。14名が知的単一、主障害が知的障害の重複障害、知的障害を併せ有する肢体不自由、肢体単一と4つの教育課程に基づき学習しており、それぞれの理解度や生活年齢に配慮しながらグルーピングし、指導計画に基づき各授業を行っている。様々な教育課程にて学習しているという実情もあり、学部の中での実態の幅は校内でも広いと感じている。中学部主事、教務主任と10名の担任を合わせ12名の教師で生徒の変容や学習状況などについて共通確認を図りながら日々指導にあたっている。障害特性からの様々な行動、思春期特有の心と体の変化等指導上の悩みは様々あり、生徒とその行動の背景となる家庭事情にも真摯に向き合いながら丁寧な指導を展開しようとしているところである。少人数の学部集団であるが故、学年を超えての生徒同士の関わりも多い。お互いの様子をよく見ており、休み時間にはそれぞれが違う遊びを展開しながらも同じ空間でルールを変えながら共に遊びを展開していくような様子も見られるようになった。

「情報活用能力」については「教科を超えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力」の一つとして掲げられており、その重要性については周知の通りである。

「情報活用能力」はどのようなものかについては様々な捉え方があり、例えば、「身の回りの情報から状況判断をしていく力」「予測不能な社会を生きていくための汎用性の高い力」などが挙げられる。つまり、生徒の学習の中においては視点を持ちポイントを絞りながら見取る必要がある。本校の学校指導重点の中では「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と情報活用能力の育成」それを受けて系統的に指導していくため、中学部段階においては「学習場面において情報機器を利用し、基本的な操作能力を育てる。」と中学部指導重点に掲げられている。本研究ではこれらの力を授業の指導場面のポイントを絞り、見取りながら、活用させていくためにどのような授業づくりをするのか考えていくこととした。研究を進めるにあたりまず、基礎的・基本的な知識及び技能の習得のため、これまでの実践の中で活用されてきた紙媒体の教材や具体物等の操作を通じた体験的な学習活動の必要性を教師間で再確認していくこととした。また、ICT活用を含めた情報活用能力について、チェックシートを活用しながら生徒の実態把握を複数の教師の目で行っていきたい。そしてICTを含めた情報機器を「使えない」から「使わない・触らせない」のではなく、指導上のねらいを達成するために「どう使わせるか」について私たち教師が意識を向けながら、その活用について考えを深めていきたい。

3 研究目標

(1) 情報活用能力育成のための手立てを教師間で考察、実践、検証していきながら育

成のための手立てを探る。そして手立てが生徒の情報活用能力育成へ妥当であったか検討し、授業改善を行い、教師の指導力向上を図る。

(2) グループの中で、それぞれの教師の指導実践や生徒の学習の様子を教師間で共有して、行った指導に対しての評価を複数の教師で行い、日々の学習場面や生活場面に反映させることで、生徒に対する深い理解を進める。

4 研究内容及び方法

(1) ICT活用を含めた情報活用能力育成について対象生徒と指導場面を設定し、指導の手立てを考察、生徒の変容から手立ての検証を図る。

(2) 設定した指導場面において指導上のねらいを達成するために ICT 機器をどう使わせるかについて教師が意識を向け、生徒に適した活用方法について考えを深め情報活用能力育成への手立ての一助とする。

5 研究経過

	日にち	内容
研究日①	5月16日(木)	学部研究テーマ、研究計画・内容の意見交換
研究日②	5月27日(月)	学部研究テーマ、研究内容の確認、グループごとに対象生徒の選定
研究日③	6月6日(木)	チェックシートを用いた実態把握、研究対象とする指導場面における実態把握と共有、指導目標の設定①
研究日④	7月23日(火)	研究対象とする指導場面の実態把握、指導目標の設定② 指導実践の振り返り・次回に向けての手立ての話し合い①
全体研究会②	8月23日(金)	中間報告
研究日⑤	8月28日(水)	グループごと指導実践の振り返り・次回に向けての手立ての話し合い②
研究日⑥	9月20日(金)	グループごと指導実践の振り返り・次回に向けての手立ての話し合い③
研究日⑦	11月19日(火)	グループごと指導実践の振り返り・次回に向けての手立ての話し合い④
研究日⑧	12月25日(水)	グループ別計画による実践のまとめ
研究日⑨	1月17日(金)	学部まとめ、来年度に向けてのアンケート

6 研究実践

(1) 「情報活用能力」について

今年度は生徒の個の課題に焦点を当て「情報機器等の利用を含めた情報活用能力の育成

に必要な手立て」についてまとめていくこととした。次年度は集団のグループにおける「学習の中で必要な情報活用能力、その育成に必要な手立て」についてまとめていくこととしたい。見取りの指導場面を1年ごとに変えて考えていき、年ごとの指導体制での考えをまとめ、在籍している生徒へ還る研究を行うこととした。

第1回の学部研究での意見交換にて本校中学部生徒の「情報活用能力」とはどのような力を指すのかを考えていこうと話し合いを進めた。その中で「生徒の実態差が大きく情報活用能力として定義づけるには幅が大きく難しいのではないか」「情報活用能力の定義については様々な文献等のものが参考になるため、学部研究で取り上げていく必要性がないのではないか」といった意見が挙げられた。

この意見を受け、情報機器をどのように活用すると課題としている個の目標に迫っていくのかについて考えていくこととした。「身のまわりの情報から状況判断ができるようになる力」「予測不可能な社会を生きていくための汎用性の高い力」といった力が挙げられた。中学部の教師で話し合い、中でも『「考えや思い」を生徒自身が他者へ伝える力』つまり「情報発信スキル」について着目し育成していくこととなった。

(2) 指導場面と対象生徒について

見取りを行う指導場面について話し合いを行い、着目したい力が「他者へ発信する力」であることから教科学習グループより少人数で生徒によってより身近であり安心できる集団の学習であることから「日常生活の指導」で行うこととなった。具体的には活動固定化しており形式化される場面である「朝・帰りの会」生徒の自由な活動の中でより思いが出しやすい「昼休み（日常生活の指導）」を中心に見取りを行うこととした。

対象生徒については2年の研究計画であることから研究成果が次年度へ生かしやすい1・2年生がよいとの意見があった。話し合いの中で中学部の日課に慣れ、見通しをもって落ち着いて学習している2・3年生から2名挙げることにした。2名とも情報の受信、発信方法について課題をもつ生徒である。2名の生徒について6月からもう一度実態把握を行い、今できていることと課題について再考した。実態から課題を導き出し2学期始業に合わせ、実践を開始しPDCAサイクルを11月まで行った。以下、実践についてまとめる。

対象生徒	MT（2年生 男）
実態把握	<ul style="list-style-type: none"> ・発語がなく、身振り、サイン、筆談等でコミュニケーションを取っている。 ・難聴である。 ・聞く経験が不足している。 ・情報を周りから得ようとする力が少ない。知りたいという気持ち、関心が少ない。自分が言いたいことだけを伝えて満足する場面が多く、他者とのコミュニケーションのやりとりが一方的になりがちである。 ・知っている言葉が少ない。

	<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な言葉の理解が困難である。 ・文字（ひらがな、カタカナ、漢字など）を音声で認識することが困難である。 ・ICTの操作はできる。※インターネット検索、アプリの使用など ・便器で排便することが難しく、自宅で自分からオムツに履き替えてオムツで行っている。排尿は小、大便器で行うことができる。
実態から導き出される指導すべき課題	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な言葉を用いて、2語文で他者に伝えられるようになると良い。 ・語彙を増やす。（動詞、名詞） ・周りのことに興味、関心を持てるようになると良い。 ・会話のやりとりを楽しいと思える経験を増やす。 ・わかることを増やす、わかることが増えることによって知りたい気持ちが増えていく。
設定した指導場面	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の指導（朝の会、帰りの会）
指導の経過 1次（学部研③、④位の時期での取り組み）	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画を見ながら実態把握した。ねらいが高かったので生活科1～3段階に下げて計画を立て直した。 ・自分から気付いてやるのが難しい。 ・小学部の時はうごきのことばの本を基に、物事の事象を言葉とイラストで示すことができた。
2次（学部研⑤、⑥位の時期での取り組み）	<ul style="list-style-type: none"> ・実態に沿って話し合いを進めた。（個別の指導計画参照） ・朝の会では始まりの時間に合わせて、自分から友達に声をかけることが出来ている。教師からの促しがきっかけで、友達に声掛けできるようになった。朝の会前のルーティンとなっている。 ・簡単な言葉を用いて、2語文で他者に伝えられるようになると良い（身振り、筆談など）。 <p>目標の再設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICTの有効な使い方を本人もまだわかっていない。iPadを使いコミュニケーションで使えたら良い。 ・自分が使う言葉等がパターン化されがちである。例えば質問「どこ？」に対して、繰り返し学習して覚えた質問（例：住んでいる市はどこ？）であれば答えられるが、ちがう言葉を「どこ？」の質問に含めると答えられなくなる。パターン化されることを崩すため、他者との会話のやりとりをする経験を増やしていく等の取り組みが必要であると考えます。 ・他者とのやりとりを設ける機会として、朝の会の流れに変化をつけていけると良い。例えば朝の会において、クラスみんなで話をするような内容の項目を追加する等。 ・経験したことを言葉に置き換えていく。（どの授業でも） ・本人の課題からみていくとICTを第一に持っていない。（補助手段）そ

	<p>の場その場でコミュニケーション手段を選んでいけると良い。</p>	
3次(11月現在)	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会、帰りの会で予定や目標を発表する際や授業での号令の際に、ドロップタップを活用しながら自分自身や他者に分かりやすく(イラスト、音声で)伝えることを行っている。 ICT機器(iPad)をコミュニケーションツールとして活用することを目的としているが、現状としてICT機器(iPad)をコミュニケーションの目的として自分から活用しようとする場面が日常生活の中では見られない。授業の中では見られ始めた。 iPadを使い相手に伝えようとしたが、音声途中のままiPadを閉じてしまうことがあった。iPadを介してやりとりすることは難しい。 やりとりを本人が楽しいと思えるようにしていきたい。伝えたい、伝わった経験を増やす。 他者とのコミュニケーションの際、本人が従来のコミュニケーション手段として使っている身振り、サイン、筆談等で他者とのやりとりを楽しむ経験を積んでいくことに重点を置くことが良いのではないかな。 	
生徒の様子と有効であったと思われる手立て、教材等	手立て	生徒の様子
	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会、帰りの会において、iPad(ドロップタップ)を活用して授業の予定を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 1日の授業予定について本人がドロップタップで音声を流した際、それを聞いて復唱しようとする生徒が見られた。周りの生徒にとっては音声が聞き取れて分かりやすかった等の良い効果をもたらしたが、本人にとっては相手にしっかり伝えられたという意識があまりなかったため、他者とのコミュニケーションのやりとりとしては少し不十分であったと思われる。
	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会において「※みんなのはなし」の項目を追加し、実施した。※テーマ(例:昨日食べた夜ごはん)を日直が決め、そのテーマに沿って皆で話す。 朝の会の「みんなのはなし」において、友だちと筆談したりiPadを介してやりとりをしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人が日直の際、自分でテーマ(すきなアニメはなに?)を決めることができた。そのテーマを友達に投げかけてやりとりを行った。しかし、友達の話の話を遮って次に進もうとする等、他者との会話のやりとりに課題が見られた。本人に対し教師が身振りや筆談等で丁寧に支援し、それを見た友達の一人が身振りや筆談で助けようとする

		<p>る場面が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の会の中では本人が進んで iPad を使おうとする様子はあまり見られなかった。筆談や身振りでのやりとりがスムーズであり、本人や周りにとってもコミュニケーションのやりとりとして分かりやすかった。
<p>考察 まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT 機器 (iPad) を、他者とやりとりをする (自分の思いを伝える、相手の反応を感じる、相手の話を聞く、相手の話に応える) 意識を高めるためのコミュニケーションツールとして活用することを目的とし、研究を進めてきた。しかし、取り組み当初は iPad を自分からコミュニケーションの目的として活用しようとする場面が見られず、他者とのやりとりのために使うものとしての意識が向かなかった。 ・ コミュニケーションに必要な言葉の数が少ないため、言語理解などの指導が必要である。そのため現時点において ICT 機器 (iPad) をコミュニケーションツールとして活用するよりは、日常生活に必要な言葉の数を増やす (インターネット、アプリのドロップタップ等を活用) ためのツールとして授業等の指導の中で活用することに重点を置く方が良いのではないかと考える。また昼休みにおける余暇時間においても、教師の支援を介して iPad を活用出来ると良い ・ みんなに伝わるコミュニケーション手段を獲得できると良い。筆談でのやりとりを行った際に、文字を書くことと同時にイラストを示すことが本人にとって有効であった。 ・ 他者とのやりとりを楽しむ手立てとして、ICT 機器 (iPad 等) にこだわる必要はないが、必要に応じて iPad を利用しながら、今後それをコミュニケーションツールの一つとして活用していくきっかけになると良い。 ・ 教科学習の中で挙手して教師を呼び、自ら iPad を取り出し、発言する場面が多く見られ始めた。発言内容は学習の中で得たことを確認するようなことや授業の振り返りで「楽しかった!!」と自分の気持ちを伝えようとすることが多い。(特に自分の気持ちが大きく動いたときにこの行動が見られた。) ・ 授業にてホワイトボードにグループの生徒の考えを記すと、自ら前に出てペンをとり自分の考えを記す場面が見られた。 	

対象生徒	TK（3年生 男）
実態把握	<p>言葉の表出が増えてきている。</p> <p>文が定型文ではなくなってきた。</p> <p>確認行動が多い。</p> <p>学校生活で困ったことを言語化できるようになってきている。</p> <p>言葉での発表が上手になってきている。</p> <p>これまでの学習を実際の生活の中で生かせるようになってきている。</p> <p>3年生ゆえの余裕や自信がでてきている。</p> <p>会話の中で、本人の思いを言語化する場面が増えてきている。</p> <p>教師や友達とのやりとりの中で、間を怖がる様子がある。</p>
実態から導き出される指導すべき課題	<p>発表場面で、みんなに共感してもらえる嬉しさを感じさせたい。</p> <p>自信をもたせたり、自己肯定感を高めたりしていきたい。</p> <p>聞き返される経験を減らしてあげたい。</p> <p>話す内容について、項目立てて考えられるようになると、やり取りをする上での引き出しが広がるのではないか。</p> <p>より豊かに言語でのやり取りができるようになってほしい。</p>
設定した指導場面	<p>日常生活の指導</p> <p>土日の出来事から伝えたいことを考え、国語数学でまとめて火曜日の朝の会に発表する。</p> <p>何をポイントにして伝えるかをまとめる。</p>
指導の経過 1次(学部研③、④位の時期での取り組み)	<p>ワークシートで話す内容をまとめた。</p> <p>モスバーガーに行ったことを伝えたいと思い、口頭で教師に伝えることができた。「モスバーガー」と書いていたため、誤字の修正をした。</p> <p>朝の会で発表を行った。</p> <p>徐々に定着しており、現在は「きのうのはなし」として朝の会に位置付けている。</p>
2次(学部研⑤、⑥位の時期での取り組み)	<p>夏休み明けに夏休みの思い出を、資料なしで発表する場面を設定した。</p> <p>他の生徒に対しての教師の質問に同調する場面が見られた。(友達のホテル、修学旅行とどう違ったか)</p>

3次（11月現在）	<p>伝えたいことや記したいことをはじめに質問し、書くことを決めたあとはアプリの立ち上げ、画像検索、保存などを生徒自身が行えるようにした。</p> <p>メモアプリでの取り組みと紙媒体の課題で「いつ」「だれが」「どこで」「なにをした」等の単語を並び替えて文章を作る取り組みを行った。</p>	
生徒の様子と有効であったと思われる手立て、教材等	手立て	生徒の様子
	<ul style="list-style-type: none"> ・日誌に一文を手書き、それをもとに発表する。 	<p>メモは「モスバーガーに行きました」だけだったが、他に食べたものや美味しかったという感想も話していた。</p> <p>他の生徒の発表に対しては、疑問を持ち、聞くことができている。徐々に定着しており、現在は「きのうのはなし」として朝の会に位置付けている。話す内容のバリエーションや、メモにない補足事項をその場で付け加えたりすることができている。</p>
	<p>目標を再設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつ、どこで、だれと、なにをした（項目数は3～5つ）について、自分で（支援具を活用して）項目を意識して話す内容を考えられる。 ・教員が聞き取り、疑似的な音声入力になることで、本人の入力の不自由さを補うことができる。 ・Class notebookを活用し、本人は自分の端末で確認しながら教師がワークシートに記入する。 	<p>夏休み明けに夏休みの思い出を、資料なしで発表する場面を設定した。</p> <p>教師の共感に対して嬉しそうにしていた。</p> <p>自分で感じた楽しかったことや印象に残ったことを話すことができた。</p> <p>他の生徒に対しての教師の質問に同調する場面が見られた。（友達のホテル、修学旅行とどう違ったか）</p>
<p>iPad「メモ」アプリを使って音声入力をした。</p> <p>「だれと」の要素を話す場面を設定した。</p>	<p>本人が自分の経験を覚えており、表出できるという経験が重ねられれば、伝えたい気持ちが大きくなっていくのではないかと。なにより本人が楽しそうである。</p> <p>自分が文を作って考えることが</p>	

		<p>自己肯定感や自尊心の育成につながる。</p> <p>アプリ操作が見守りでできるようになってきた。</p> <p>教師の見守りや簡単な質問にて自分から話したい内容を考え入力を行うことができた。50音を正しく理解しているからか、文字入力の際にスムーズに次の文字を探したり、予測変換から誤入力を減らしたりすることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プリントでの取り組みで「いつ…あとはだれがだ」と口にしながら単語を探して並び替えようとする姿が見られた。
<p>考察 まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・CTとのやり取りの中で、コミュニケーションの経験を重ね、自分の発表に対する様々なフィードバックを経験できた。こうした内容によって、コミュニケーションの意欲が高まっていると考えられる。一方、授業中の発言では「正しい答えは何か」を考えてしまい、意欲が優先される場面ではないと考えられる。社会参加を考える上で非常に大切なコミュニケーションの一步になったのではないか。(例：体育での思いやりのある一言、本生徒とかかわっていて気持ちの良い一言が増えてきている) 50音表の定着については、実際にiPadを使用することで理解していたことがこちらへ伝わった。 ・機器の活用については、音声入力からキーボード入力(予測変換込み)発展した。情報機器を使うことにより文字を書く負担を軽減でき、音声入力、予測変換を活用することでより正しく自分の言葉を入力して表現できるようになったのではないか。また、文章に画像を添付することにより自分自身が伝えたいことを自身が再確認でき、他者にもより分かりやすい方法で伝えることができるようになった。 ・本単元に対して、題材設定が有効であった。自分の考えに情報を肉付けしていく作業を行い、自分の思いを他者に伝える力や文章を構成する力が高まった。情報発信スキルの基礎的な能力を高めることにつながった。情報の収集では画像を収集したり、必要な情報を検索したりできるようになった。メモアプリと紙媒体、口頭での教師とのコミュニケーションを通じ、自分の伝えたいことをうまく文章化することにつながったと考えられる。発表の内容がパターン化せず、自分が話したいことを考えられている。語彙の増加(例：「気を取り直していき 	

	<p>ましよう」の発言)が見られる。知識を結び付ける力がついてきていると感じる。50音表が定着していることによって、入力の際にどの文字がどこにあるかを見つけられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中に発言を求める際には、スムーズに発言をすることはまだ難しい印象がある。→学級の中では、発言が受け入れられる安心感があるのかもしれない。伝わる楽しさや、自分の発言をきっかけに会話が弾むことに対する楽しさを感じられるようになってきているのかもしれない。 ・自分の経験したことを具体的に振り返ることができるようになってきている。また、自分の思いを、資料を活用することで詳しく伝えられるようになってきている。確実な理解や力につながってきていると感じる。自信をもってコミュニケーションに望んでいる。朝の会の場面でできていることが、より般化されていくことに期待したい。
--	--

7 研究のまとめと今後の課題

研究のまとめを行うにあたり情報機器を使用する中で

- ① 使用させる場面 (どの場面が適していたか)
- ② 指導すべき課題に対する手立ての成果
- ③ 教科学習へつなげるための視点

について2名の指導実践を振り返り考えていくこととした。

MT (2年生 男)	
使用させる場面	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中では身振りと筆談でのやり取りは即興性があり使いやすかった。 ・教科学習の中では iPad を使い (メモ機能のようなアプリ) 自分の考えを記すことができるようになってきている。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションに必要な語彙が少ないため、言語理解などの指導が必要である。そのため現時点において ICT 機器 (iPad) をコミュニケーションツールとして活用するよりは、日常生活に必要な言葉の数を増やす (インターネット、アプリのドロップタップ等を活用) ためのツールとして授業等の指導の中で活用することに重点を置きながら指導に当たる。 ・場面ごとにより正確に本人の考えや意見を発進できるような支援を行った。身振り、イラストを用いこちらの言いたいことがより明確に伝わるようにしていった。お互いの言いたいことが正しく伝わっているか再確認することも必要であった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・発信方法として発話のみでなく情報機器を活用し選択して

	伝える場面を設定するのがよい。
--	-----------------

TK（3年生 男）	
使用させる場面	・個別に学習する時間に使用することが有効であった。本人のペースで使用でき、落ち着いて学習することができた。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・情報機器を使うことにより文字を書く負担を軽減でき、音声入力、予測変換を活用することでより正しく自分の言葉を入力して表現できるようになり、発表場面で、みんなに共感してもらえる嬉しさを感じる事ができた。 ・文章に画像を添付することにより自分自身が伝えたいことを自身が再確認でき、他者にもより分かりやすい方法で伝えることができるようになった。 ・情報機器を使い、話したい内容について、形式化し整理しながら項目立てて考えられるようになったことで、より豊かなやり取りができるようになった。
課題	・学習の中で自信をもって発言することが課題となる。慣れている教師と友達との関係性の中でできることを違う場面でもできるようになることが課題となる。できたことを実感させていき自己肯定感を高めることが必要。また、知識の定着を本人が実感できるように授業の中で「前にやったことを覚えているかな？」等の振り返りを行っていくことが必要である。

以下に今年度の成果と課題について3点挙げる。

（1）生徒の表現方法の選択肢を設定する。

1年間情報発信スキルについて2名の実践を通し、考えてきた。その中で2名とも特に「自分の知識（言語）を使い、他者へ発信する力」について成長が見られた。発語に課題のある生徒が発信する際にどうすれば他者へ伝わるか情報機器を使いながらやりとりを重ねた。その中で生徒自身が「こうすれば伝わった」と経験の中で気づき、同じ場面を教師が設定することでどのように発信するかを自ら考えて伝えようとする姿が2名とも見られた。また、情報機器のみではなく身振り、筆談などの発信方法を教師とのやり取りの中で使いながらその良さ（より伝わりやすいと感じる）を知ることで様々な方法で伝えようとする様子が見られ始めている。生徒が発信する際にその生徒にとって何が最適かを考えていく中で「発信方法の選択肢を設定すること」さらに「発信する場面に応じ臨機応変に発信方法を選び、使っていく力を生徒につけさせること」が必要であることが考えられる。また、発信する場面を教師が意図して設定し、そのやり方について枠組みを作り、発信方法を導くことも必要である。発信方法を構造化し、見通しをもって安定した気持ちで発言

できるようにしていき、その方法に慣れたころに違う方法を提示することが必要である。

(2) 実践についての見取りの評価

情報機器の利用を含めた実践であったが、生徒の実態や変容を動画やエピソードを集めていくことで成長を見取ってきた。生徒の見取りの方法について学部研究のように時間を設定し実践内容を伝えあい複数の教師の目で見えていく必要を強く感じた。また、情報活用能力のどのスキルを育成するかの見取りの視点をもっていることも重要であると改めて分かった。さらに教師間のみではなく客観的に評価できるような体系表などのツールの必要性も感じた。

(3) 家庭を含めた生活につなげていくこと

最後に、学校での実践をこれからの生活へ般化していくことが課題として挙げられる。特別支援学校で課題となる「学校ではできるが…」という視点である。特に発語に課題のある生徒について本当に伝えたいことが何かを受信する側が正確に見取ることが難しいことがある。生徒が学んだことをアプリや画像等に残した記録を残しておき、端末を持ち帰り家庭へフィードバックすることが考えられるかとの意見も出された。毎日の取り組みとなると難しい面があるが、単元の終わりや、学期末に行うことが現在の中学部の中では可能ではないかとの意見が挙げられた。今年度の研究での取り組みを踏まえ、まずは学校での取り組みを構築していくことが重要である。そして今後は家庭との連携のために学習の記録を生徒自身が残し、振り返ることができること、その振り返りを家庭でも行えるとよいと考える。

(4) 次年度へ向けて

以上のように情報機器を利用しながら2名の生徒の「情報発信スキル」について考えていった。発語に課題のある生徒については情報機器の活用が非常に有効であった。その反面、生徒の課題について「どのように伸ばしたいか」、情報機器を使用して「どの力を伸ばしたいか」を教師が明確に設定する重要性もあった。次年度については教科学習の中で必要な情報活用能力、その育成に向けての手立てを考察していく。前述に挙げられた3点を念頭に置き、来年度の中学部生徒にとって必要な情報活用能力は何か、どの力を育成していきたいかを考え、手立てについて検証していけるとよい。